

全 体 討 論

（大塚） 松下さん、どうもありがとうございました。

それでは、話題提供者のかたと木村先生、前にお願いいたします。

話題提供が3時50分に終わる予定だったのですけれども、4時20分まで全体討論とありますが、懇親会が5時半から始まるということもありますので、申し訳ありませんが、15分ぐらい延長させていただきます。もし、何かご都合があるかたがありましたら、申し訳ありませんが、ご遠慮なく適宜抜けて下さって構いませんので、少し延長させていただくことを、まずお許しいただければと思います。

最初の基調講演の木村先生のお話も含めて、4人のかたから話題提供をしていただきましたけれども、何かご質問、ご意見等がありましたら、どうぞフロアのほうからご自由に出していただければと思います。いかがでしょうか。

（質問） H私立大のK^{*1}です。

本日は、普通は「まるまるされる」側の論理とか、「まるまるされる」側の視点というシンポジウムが多い中で、「評価する側の論理」という標題のフォーラムをおやりになった京都大学さんの見識に敬意を表したいと思います。といいますのは、文科省のかたが言われましたが、このフォーラムは、評価する側とされる側の話ではなく、まさに評価する側の論理を徹底的に評価される側から評価するのがこのフォーラムの目的ではないか。そういう視点から、私は質問させていただきたいと思います。そういう意味では、私の質問は、松下先生には失礼ですけれども、私の視点からは除外させていただきます。

それから、10年前に、大学基準評価ですか、こういうものがあつたことは存じ上げていますけれども、正直いって、そういうテーマでこういうシンポジウムを開いてこれだけの人が集まるわけはなかったですね。それはなぜかといいますと、それが私の質問の主旨ですけれども、木村先生のお話をお聞きしていると、一貫して評価する側の言い訳が多いような気がするのです。それから、文科省のかたは評価に関して、これは基準協会なり大学評価委員会に基づいてということをおっしゃるのです。これはまさに例のいつもの論理ですけれども、審議会の隠れみのにする論理です。そうしますと、評価する側の論理に何が欠けているかということなのです。それは、文科省の奈良さんの中にもはっきりと正しく引用されていると思いますけれども、まさに国民から負託されている正当なる権限の行使です。その視点が抜けているために、評価する側のかたが、どうも言い訳的なことが多い。あるいは、文科省は隠れみのによその審議会を使う、そういう視点が多いような感じがするのです。

ちょっと長くなりますが、その点に関して、木村先生なり奈良さんは、どうお考えなのでしょうか。

（大塚） ちょっとお答えになりにくいような質問でしたけれど。

（奈良） 審議会の隠れみのというお話でございましたけれども、やはり大学評価について、特に大学の質に関していえば、それはやはり大学人がいちばんよく分かっていることではないかと思っておりますし、これからどんな評価をしていくのかということは、やはり大学関係者、あるいはタックスペイヤーとしての経済界とか、幅広い社会のかたがたのご意見を聞くことが必要です。評価も、何のためにするかを十分考えなければいけないわけで、そういうことから考えますと、審議会なりということで、いろいろなかたのご意見を踏まえてやることは必要なのではないかと思っておりますし、評価というのは、もちろん大学をよくするためにやるということと同時に、社会に対して、大学の活動がちゃんと行われているのかどうか、大学はこんないいことをやっているのだ、あるいはこういう改善点があるのだということは明らかにしなければいけない。それを求めているのはやはり国民、そして、その代表者というか、そのかたがたの意見を集約していただくのが審議会だろうと思っております。

決して審議会の隠れみのにしているというわけでもございませんし、文部科学省だけの論理でやっていることではありません。やはり、特に大学人ですね。これが中心になって評価制度なり、大学をよくしていく、私どもはこういうことが必要だと思っておりますので、そういうことで、中教審なりのご意見を伺っているのだとご理解いただければ

ばと思っております。

（木村） ただいまのご質問で、言い訳ばかりでないかと、確かにそういうふうに取りられるかもしれないことは私自身も理解できます。しかし、私は初めから評価をやれということで今の職に就いたわけではないのですけれども、それがたまたまこういうことになってしまった私のスタンスを申し上げますと、仰るとおり、公的な存在、国民から負託された存在である大学には、十分だとは言いませんけれども、それなりの金が投入されているわけでありまして、その日本の大学が世界から相手にされなくなったら大変だという立場にあります。

そういうことで、私どもは、試行評価の段階から、イギリス、先ほどお話が出ましたオランダ、それから、アメリカは私どもの場合はあまり参考にならないのですけれども、フランス、ドイツ、ドイツも若干始めましたので、そういうところとのコミュニケーションを密にしながら、何とか日本の大学が国際的に孤立しない存在にしたいということの基本に「評価」をやってきているということです。

（大塚） ありがとうございます。

前田さんの話にもありましたけれども、やはり大学は、評価に対して受け身的であってはいけないのではないかなと思いますので、この機会を積極的にとらえていくような姿勢も求められているのかなと思います。

いかがでしょうか。ほかにご意見ございますでしょうか。

（質問） B私立大のOと申します。

私は教育学を専門にしまして、大学で教員養成にもかかわっております。学校教育という枠組で考えてみましたら、教育の対象は、児童、生徒、学生と変わりますが、大学も学校教育の一つの位置づけられるとみることもできます。そういう学校教育における評価では、それに関わる評価論、評価観、エバリュエーションとかアセスメントとか、いろいろありますが、それと、ここで議論されてきた大学を対象とする大学評価とは、評価の原理という点で一貫するものがあるのかどうかというあたりが気になっています。

今日のお話の中では、特色G Pの教育効果の測定という文脈のお話がありましたが、ひょっとしたらそのお話は、大学を対象とする大学評価とはある種異なった文脈、土俵にあるところの教育評価ですね。学校における教育評価の、ひょっとすれば、狭間、中間的なあたりに位置するのかなと思いました。つまり、評価がどういう原理に立って行われるのかという評価論ですね。そのあたりをお聞かせいただきたい。

ちょっと付随して述べますが、各大学の理念とか目的とかというものと目標というものとはかなりレベルが違うのではないかと。よく、言葉遣いとしては目的・目標などといったりしますが、例えば特色G Pとか、建学の精神とか理念とかというものがかわってきた場合に、教育の効果を数値目標として掲げるのは非常に困難になってくるので、到達度によって成果を測ることも困難になってくる。そうした場合に、そもそも論というのはないのかも分かりませんが、そもそも評価するというのはどういうことかという評価の原理みたいなものが、やはりそこにかかわってくるのではないかなと思うのです。その辺、ごめんなさい、私が個人的に自分の頭の中が整理されていないだけなのかも知れませんが、何かヒントを与えていただければありがたいと思います。

（大塚） もともと大学評価がどういう評価の原理によっているのかということかなと思いますが、その辺は恐らく手探りで、そういう意味で機構も評価文化の醸成という言葉を使っているのだと思います。

何か今のご意見でありますでしょうか。

（松下） 私はこのセンターに来る前は、初等中等教育の教員養成の仕事にかかわっていましたので、その方面の教育評価にもある程度は通じているかなと思います。

私自身は、学校に対する教育評価と、大学を対象とする大学評価、大学評価の中には経営評価だとか研究評価も含まれますが、今日の大学教育評価ということでは、かなり共通している部分が多いと感じています。そのことを今日の発表の中でも、例えば改善とアカウンタビリティとして述べました。アカウンタビリティはどちらかとい

えば大学に強く求められているような印象もありますが、今は小学校、中学校、高校でも説明責任ということで求められているものです。それから、今日、二つの評価をするときに使いました幾つかの視点も、一般の学校に対する教育評価でも出てくるような視点ではないかと考えています。

（大塚） それでよろしいですか。

（質問） S 私立大のOと申します。

少し教えてほしいのですが、例えば私学の場合ですと、木村先生のほうに申請するのではなくて、前田さんのほうに申請するのではないかと思います。どこで申請してもいいものかどうかということですね。

もう1点、可能性に対する評価というのがあっていいと思うのですが、常に評価というのはやられたことに対する評価みたいですね。将来、この私学がもっと発展するであろうという視点があるのかなのか。その辺を教えてください。と、非常にありがたい。

それから、具体的に、今まででも設置基準の評価をしていると思うのですが、ほとんどが管理職あたりをさっと触れられて、本当の評価をしているのかどうか。その大学に対する問題点は何なのか、そしてエンカレッジするような評価につなげてほしいのだけれど、単なるレベルというか、階層を分けるような評価しかないような感じがしてしかたがないのです。その辺で、何かコメントをいただけるとありがたい。

（前田） まず、大学評価はどこで受けてもいいのかということですが、これはどこで受けてもよろしいわけです。ただ、基準協会の正会員だと、正会員としての義務は果たしていただかなければいけないので7年ごとに協会の評価を受けていただくことになりますが、基本的には、私立が機構を受けていけないことはないし、国立大学が基準協会を受けていけないことはないわけです。また新たに、4年制大学についてはもう一つ評価機関ができる予定ですが、そちらを受けていただいてもいいことになります。

そして、可能性に対する評価ということをおっしゃったかと思うのですが、可能性というのは、実現の見込みがどれくらいある可能性なのかということが書かれていなければ、やはり評価をすることができません。時々あるのですけれども、問題点の指摘のところで、ご自分の大学はこういうところが問題であると書かれている。では、将来の改善方策となると、それをただ希望に裏返ただけで、こうこうしたいと書いてあるだけがあるわけです。これは、本当に希望が書いてあるだけで、例えば、今、ここまで来ているけれども、まだ理事会の承認まで至っていない、それはこういう障害があるからだ。でも、それさえクリアできればこういうことができるのだというような書き方をすれば、これはかなり具体性がある。すごく大きなことをお書きになろうとする傾向があるのですけれども、実は具体性が大事なのではないか。こういう委員会ができて上がった。そこで、この何月にこういうことが変わったので、こういうふうに展開していくであろうというように具体的に書かれていることが大事ではないかと思います。

それから、評価で、大学を階層に分けるような評価ということをおっしゃっていましたが、基準協会では、評定を内部ではつけていますけれど、今、公表していません。公表まで行きかけたのですけれど、まだ時期ではないということで公表は差し控えています。ですから、公表された結果を見たときに、そういう判断を下せるような評価はしていないと確信しております。

エンカレッジするような評価という意味では、それは基準協会が最初、平成8年に今の自己点検・評価に基づく評価を始めたときに、いちばんの特色としてやり始めたことが、長所、よい点を指摘することでした。でも、これは大変なのです。問題点を問題があると言うのは比較的楽なのですけれども、よい点をよいと言うことは、基準協会がお墨付きを与えたと誤解されるのではないかとということもあって、慎重にしなければいけない面があります。それでも、勇気を持ってよい点はよいと言おうということで、問題点とよい点、両方とも結果に入れることにしています。

大体お答えしたことになりますか。

（質問） K 私立短大のMと申します。

奈良さんと、あと、どなたでもけっこうですけれども、大学の評価というものは、実は入ってくる学生の質などに

も関係がありますね。それで、文科省には高等教育局と初中等局があると思うのですけれども、大学評価などの議論の中で、初中等教育で今議論されている基礎学力などとの関連といえますか、その点の連携をどのように考えていくべきかといった議論はなされているのでしょうか。つまり、大学を社会から切り離す形ではできませんよね。出口論的な商品論はありましたけれども、入り口との関係で、大学をどう評価するか、教育をどう評価するか。そういう議論がなされているかどうかをお聞きしたい。同じく木村先生にもお聞きしたいのですけれども。

（木村） はっきりイエスかノーかと言われると、現状ではノーでしょうね。ほとんどなされていないと申し上げたほうがよろしい。これは世界じゅうにそうですね。ただ、私どもが非常に意識していますのは、あまり詳しくご説明できませんでしたが、私どもの教育評価において、「教育の実施体制」の評価項目の中に含まれておりますアドミッション・ポリシーという点であります。どういうアドミッション・ポリシーを取って、それがどう実行されているのか、これは、今の日本の大学にとっては非常にづらい質問なのです。私大まで含めれば別ですけれども、恐らく国立大学というフレームワークで見た場合は、アドミッション・ポリシーは本当に出しにくいと思います。それでもあえて、これを聞いているのです。

ですから、しいていえば、そここのところで、どういう学生を取りたいかということが明らかにされていけば、例えば、自分の大学は、小中、あるいは高等学校の教育にどういうことを求めているかというメッセージにもなってくると思うのですが、現状では、そここのところが切れていると申し上げてよろしいかと思います。

マイクを取ったついでに、B私立大のO先生のご質問、それから、S私立大のO先生のご質問にもコメントさせていただきます。まず、私は、すべてに通ずる「評価の原理」というのはあるのかなと、いつも思っています。それは、どういう目的で評価をやるかということにすべてかわるのではないかと、私は思っています。ですから、今は恐らく、前田さんの説明にもありましたように、大学評価というのは総合規制改革会議の影響を非常に受けています。私も確かにそう思いますけれども、それよりもっと大きいのは、先ほどから申し上げている日本の大学を国際的な孤児にしたい、するべきではないということからの評価ですから、やはりそういう評価のコンセプトに基づいてデザインせざるをえないということで、そういう意味で、評価の原理というものはあるのかなと疑問に思っています。

それから、ご質問の趣旨がちょっと分かりにくいところがあったのですけれども、大学に対する評価と、いわゆる初中教育に対する評価とで共通点があるのかというご質問だと取れば、私はあると思います。例えば、私どもの試行評価の6つありました、「教育の実施体制」、「教育内容面での取り組み」、「教育方法及び成績評価面での取り組み」、「教育の達成状況」、「学習に対する支援」、「教育の質の向上及び改善のためのシステム」といった評価項目は、もちろん内容は違いますが、完全に初中教育にもそのまま当てはまることですね。ですから、そういう意味でいうと、学校教育、いわゆる普通の小学校・中学校に対する評価も大学評価も、中身は違いますが項目としては同じようなものになりうる可能性があるということです。

それから、S私立大のかたのご質問で、将来の発展性の評価ということですが、これは非常に難しいです。ただ、私はこういうふうに解釈しています。私どもで立てた6項目、つまり、先ほどからお話が出ているP D C A（Plan-Do-Check-Action）というサイクルをきちんと持っておられる大学は、多分、将来の発展性の可能性も相当秘めているのに対して、そこがどこか1か所でも欠けているような大学はなかなかそこが難しいと思います。では、将来の発展性についてどうすればいいかというと、これは国立大学だけについていいますと、運営費交付金というのが来るわけですが、その配分を学長なり学部長がどうやるかによって、将来の発展性は決まってくるのだと思います。

それと、話は長くなりますけれども、英国にウォーリックという大学があります。バーミンガムのすぐそばです。これがものすごく社会的な評価が高くなっているのです。ここはどうやったかという、これは英国の評価ですから、研究評価でもらうお金はそう変わりませんが、学長が、これを徹底的に重点配分しているのです。ウォーリックにはゼーマンというカタストロフィ・セオリーの大家がいましたが、これをオックスフォードに取られてしまつてがたがたになったのです。そういうことで、もらった運営費交付金、自分たちの稼いだ金を、いっぺんにどかんと投下して、一気に15人の数学のフルプロフェッサーを雇ったのです。それだけ大々的にやれば、当然、英国じゅうから、あるいはアメリカからも来ましたが、優秀な数学の教師が集まってくるわけです。それで一気に上昇しました。

ですから、やはり一つは、評価をバランスよくやることと同時に、オフィサー、つまり学長なり学部長のそれこそ

リーダーシップですね。それによって将来の発展性が決まってくるのではないかと、私はそう思っています。
ちょっと長くなりまして、申し訳ありません。

（大塚） 初中等教育との連携、入り口との関係について、奈良さんのご指名がありましたがいかがでしょうか。

（奈良） 今、木村機構長がおっしゃったとおりなのですが、文科省で具体的に検討されているかといいますと、必ずしもそういう検討はいたしてないわけです。ただ、今回の認証評価制度では、文科省として評価機関を認証するわけですが、その際、各評価機関のほうで評価基準なりを定めていただきます。当然、その際の評価の視点としては、先ほどの大学評価・学位授与機構では、それぞれの目標・目的に沿った形で、そこを踏まえた評価を行うということでありましょう。また、そのほかの団体におきましても、当然、社会の中での大学ということで、どうとらえているのか、大学として社会にどういう貢献ができていのかどうか、そういう点なども評価するということもありましょう。そういう中で見ていくのかなという感じはしております。

また、木村機構長のお話にもありましたとおり、大学として、入学者としてどういう学生を求めている、それで4年なり6年というスパンの中でその学生に対してどのような付加価値をつけて社会に出していくのか、こういうところまで含めて評価していくことが望ましいのだらうと思っております。そういう中で、初中教育との連携の問題も解消されていくのではないかととらえております。

（大塚） それでは、後ろのほうでもう一人。

（質問） M 私立大のSです。前田さんに質問いたします。

水準評価と達成度評価は将来一本化されるべきということ、大変模範的な解答だと思うのですが、私が聞きたいのは、基準協会の第三者評価としての水準評価というのはどのように位置づけられているかということです。基準協会の評価の重視点が4つ示されていますが、これは、大学基準協会の正会員としてふさわしい水準ということかと思えますし、それがそのまま水準評価の定義みたいになっているのですが、正会員ということではなく、第三者評価として、水準評価がどのように位置づけられているのかということです。その点をお聞きしたいと思います。

（前田） 今おっしゃったのは、認証評価をする立場としての大学基準協会がということですか。

（質問） つまり、大学基準協会の正会員としてだけに通用する用語なのか、それとも、認証評価機関全体にこの水準評価というのは位置づけられているのかということをお聞きしたい。

（前田） 今、大学基準協会の認証評価では、正会員になるという大学だけを受け入れているわけです。これは認証された際に留意事項等が付されたこともあって、今後、基準協会の会員にはならないけれども、基準協会で認証評価を受けたいという大学も評価を受け入れるために、今、検討しているのですけれども、会員にならないとしても同じ水準での評価をしていくであろうと考えられます。それが基準協会の存在根拠であるので、基準協会がやる認証評価は、やはり正会員に求められる水準を同じく尺度として用いていく。ほかの評価機関がどういうことをされるかというのは、また別の話だと思います。

（質問） けっこうです。

（大塚） 認証評価という言葉がよく誤解されるのですけれども、認証というのは、評価機関が文部科学大臣から認証されているということです。その認証された評価機関による評価ということで、評価の内容は、認証評価機関に任されているのです。ですから、水準を満たしているかどうかという評価をしなくても、ランキングの評価をしても、文科省から認証される評価の枠組をもっていかまわらないということです。そういう意味なのですから、どうも

大学を認証するための評価というように誤解されている向きがありますので、その辺は注意していただければと思います。

林先生、先ほど、何か質問をこらえていらっしゃったので、ぜひ。

（林） せっかく木村先生がいらっしゃるので、どうしても一つ聞いておきたかった。先ほどから先生のご説明の中で、国際的に孤立してはいけない、国際的通用性という言葉が出てきているのですが、大学の中で平教員としている私などからしますと、いちばん分かっていないのはその点なのです。これだけ毎日忙しい目をして、一生懸命研究して、一生懸命教育しているのに、どこが悪いのだろうと思う。国際的孤立ということを言われると、要は、ちゃんとやっているというアリバイさえ評価で作れば、それでいいと思ってしまうのですが、何かもっと本質的な問題がありそうな気がする。何を見ておられるのかということ、あまりちゃんと聞いたことがありませんので、まず、それをお願いしたい。

（木村） 私が国際的孤児になってしまっただけではないというのは、日本の大学がやっていることが全然だめだからという意味ではないのです。要するに評価のメカニズム、つまり、国際的に通用する評価のメカニズムをちゃんと持っていないと大変なことになりますよと申し上げているので、決して日本の大学がやっていることが国際的に通用しないということではありません。私は、日本の大学はりっぱにやっている、全部とはいいませんけれどもほとんどはちゃんとやっていると思います。ただし、それを、国際的な質保証のメカニズムに乗せて、日本はこういう評価をやっていますよ、こういう評価結果ですよということを国際的に発信しないとだめだということです。

極端にいうと、今、日本の大学の情報はほとんど出ていないのです。文部科学省が多少英文の、留学生のためですか、何かありますけれども、その種ものは国際的にはほとんど相手にされていません。だから、私は、随分、OECD、UNESCOなどに出張しますけれども、そのたびに外国から「日本の大学の情報はどこにあるの」と聞かれるのです。ほとんどないのです。そういうことで、国際的な孤児になっては困るということです。

それと、マイクロホンを取ったついでに申し上げますと、さはさりながら、日本の大学はある意味ではピンチになっていると思うのです。「留学生10万人計画」、中曽根さんが言われて、やっとおととしかな、実現しました。今、11万人ぐらいいますけれども、今、何人、日本から学生が流れているかご存じでしょうか。実に10万人近い学生が外国へ行っています。ということは、ある意味では日本の大学が、今の日本の若者に十分な満足感を与えていないという側面があるのです。

東海大の前の学長の松前先生が非常に衝撃的なことをおっしゃっていたのは、ある学長が集まった会合、国公立の枠を超えた会合ですけれども、18歳人口がうんぬんなど、今やそんな問題ではない、このままほうっておいたら日本から若者がいなくなるよとおっしゃったのです。ある意味では、私は全く同感です。

たまたま英国の大学に留学している子供たちを個人的にかなり知っていたものですから、何で日本の大学院に行かないで英国の大学院に行ったのかというアンケート調査をやったのです。これは個人的なアンケート調査です。データを150人ぐらい集めたと思います。女性が多いのですが、その子たちの日本の大学に対する批判は強烈なものがあります。非常に不満を持っている。そういうことで、彼女たち、彼らは英国へ流れていっている状況ですから、やはりその辺も、先ほど申し上げたことと別に、日本の大学として相当頑張っていかなければいけないのではないか、気をつけていかなければいけないのではないかとこの部分もあると思います。ついでに申し上げさせていただきました。

（大塚） それでは、もう20分近く時間を延長しておりますけれども、どうしてもこのことを言っておきたいというかた、あと1名、2名……、あ、5人くらい手が挙がってしまいました。

それでは、お一人ずつ簡単に、手短かにお願いします。

（質問） F 公立大のTと申します。

今日、大変興味深く伺ったのですが、結局、評価機構の話聞いて自己改革していくにしても、まず、自分自身がどれだけ問題意識を持てるかということが、大変重要だと思いました。そうすると、内発的な改善の契機として、大

学教育を考えていくうえで大きなインプットとして、重要なヒントを与えてくれるのはやはり学生ではないかと、私は改めて思っております。

それと、今日は「評価する側」ということですが、授業評価する側としての学生の力量をどういうふうに見るか、能力をどういうふうに見るか、それを向上させていくことについて、これは今、うちの大学でも大変大きな問題になっているのですけれども、このあたりのことについて少しご意見を伺いたいということです。

(質問) O国立大のHです。

先日、八王子の大学セミナーハウスでも話題になったことですが、我が国の高等教育の将来像といっても、実際は15年ぐらい先のことしか考えていない。しかも、どうなるか分からないから、それに対応できるような学生を教育しようみたいな感じになっているのです。この評価は、どうしても成果主義の批判の中でもいわれますけれども、短期的な目標の達成ということは非常に注目されるのですが、もっと50年、100年、例えば今、京大は100年以上の歴史がありますけれども、100年先ぐらいまで見通せるのかどうか。その辺で、評価するということがそういう長期的なものを見失うのではないか、どうしても注目の先を短期的なものに結びつけていくようなおそれがあるのではないか。その辺、どうお考えになるか、お答えいただければ幸いです。

(質問) 匿名をお願いします。

結果的に答えにくい質問になるかもしれないのですが、大学の評価をした場合において、評価される側として、例えば見返りというか、予算が増えたらいいなとかと思うときがあると思います。そのときに、個別の話になるのですが、京都大学の予算というのは、不文律において東京大学の3分の2というのが、あるかないかは別にして、よくうわさに流れています。京都は頑張ったら予算が増えるというのだったら頑張ると思うのですが、この辺に関してはどう思われますか。別に京都でなくてもいいのです。私立大でもいいのですが、分かりやすい例として、お願いします。

(質問) 質問というよりも要望ですが、E私立大のIと申します。

臨教審のころから現在までの変化は、木村先生の話は非常によく分かるのですが、一方で、規制緩和をどんどん進めざるをえない状況と、少子化における大学自身の存在価値、あるいは存立が脅かされている段階で、多様化は必至だと思っています。多様化を進めていった場合、先ほどの水準化ではありませんけれども、大学評価というものに、ある一つのフレームワークをつけるのは大変難しくなると思います。多様化をどういうふうなフレームワークの中で考えていくか、この辺のところを、これからも政策的に考えていただきたいということを希望します。

(大塚) それでは、授業評価の話が出ましたので、松下さんから、マイクを順繰りに送ってきていただいて、それぞれの話題提供者のかたから、一つの質問を取り上げていただいても構いませんし、それから総合的にでも構いませんので、何か一言ずつコメントをいただきまして、最後に林先生に総括をしていただこうと思います。

(松下) 学生の評価能力をどう高めていくかということですが、学生による授業評価が意味を持つためには、そのことはとても重要なことだと思います。やはり学期末にただ段階評価させるだけでは評価能力をつけることはおぼつかないわけで、例えば、私たちのセンターの試みでいいますと、「何でも帳」というので毎回授業後に意見や感想を書かせて、それに応答するというのをやっています。それから、私の授業参観した実践でも、毎回は無理にしても、例えば授業の期間の半ばあたりで一度、学生からの要望だとか評価に対して、教員の側が答えていく時間を設けている。そういうことで、対話の中で授業の何を評価すべきかとか、どういうふうに評価すべきかを考えさせる。あるいは、自分がこういうふうに見ていて、ほかの学生はどう見ているのかというようなことを突き合わせていく中で、学生の評価能力もついていくのではないかと考えています。

(吉田) 将来像を我々は持てるのか、評価することによって、逆に非常に短期的なスパンでしか物事を考えなくなる

のではないかとのご指摘をいただきました。そういう側面が皆無とはいいませんが、特色 GP に携わってきた者としては、そうしたことを極力排除しようということが根幹にありましたことを申し上げておきます。過去の蓄積を評価するとともに、そこにどう将来的な発展可能性を読み込むか、これは非常に難しかったことは確かですが、そういった視点を持つということとは評価のプログラムの中でしてきたつもりです。

当初は、これは最低5年間の蓄積を持つものを対象にしようという話もあったのですが、組織を単位とした場合、近年、大学も学部等の改革がかなり行われている中で、学生が1サイクルする4年、短大の場合は2年というサイクルですら物事を見ることが難しくなっている状況があるということで、規定年数をつけるのはむしろ外したぐらいです。ただ、評価を通じて我々の大学の50年先、100年先の姿を見通せるかという問題に対しては、この評価だけで答えることはとても難しい話だろうと思います。それにはもう少し別な視点が必要だと思います。

それともう一つは、評価のフレームを極めて多様化せざるをえないというご指摘、これも極めてもっともな話です。特色 GP が特色ということにかなりこだわり、特色性、あるいは特性をきちんと書いていただき、それを単一の基準ではなく、多様性の視点から評価しようとしてきたのも、その背後には、ご指摘のような、一方では研究優先で、非常によくできる学生を取れるような大学があり、他方では、初中レベルの教育を大学でやらなければならない現実がある中で、そうしたところをきちんと取り上げていこうと考えたからです。

それは、政策的に考えるという問題であるかもしれませんが、むしろそれ以上に、個々の大学が自分の大学ではどういうことをやっている、何を目標に立て、どういう取り組みをし、その結果どうなったということをもっと示していくことが必要だと思います。そのぐらい、我々は自分の大学以外の大学をよく知っていないのではないかとように思っております。

（前田） 評価機関に身を置く者として、学生の評価の前段として、結局、どういう学生を育てようとしているのか、教員一人ひとりが自分が担当する科目が、たとえばその学科においてどういう位置づけにあるのかということを経験の認識として持っていかなければいけないのではないかと思います。ですから、それぞれの人がそれぞれの役割、自分はずっとこれを教えてきたからこれを教えるというのではなく、学部なり、その学科なり、コースなり、そこでどういうカリキュラムのもとに、どういう力量を学生につけようとしているのか、それに対して、自分はどのような貢献をそこでするのかということから出発していくことが必要ではないかと思いました。

それから、予算の反映というお話がありましたけれども、私は、機関評価の結果を予算の多寡に反映するのは反対です。認証評価なり、今、基準協会がやっている機関評価は、大学として一定の値を持っているという同じスタートラインにつくことがいちばん重要なのではないかと思います。いろいろなプログラムによって予算がつくというのは、それぞれがチャレンジされればいいことではないかと思っています。ですから、大学を総体として評価するときに、それを予算に反映させるのは非常に難しい。そういうことが起きるかもしれない、しかし、やったうえで、結局難しいというところに直面して行き詰まるのではないかと感じています。

（奈良） まず、50年、100年先のことを見てというお話がございましたけれども、やはり大学の評価において、中長期的な視点は重要だと思っております。しかしながら、一方で、その中長期的な目標を達成するためには、ある程度タームを区切って、その範囲内で具体的にここまでやるということを大学でしっかり見据えたうえで、それをきちんとその範囲内で実行していく。その積み重ねの上に中長期的な大学の発展があらうかと思っておりますので、そこもきちんと押さえていく必要があるのではないかと思っております。

それから、大学の評価と資源配分との関係ですが、認証評価制度につきましては、特に大学の予算配分に反映することを目的としたものではございませんが、国立大学法人については、評価の目的の一つとしては、やはり次の目標期間における運営費交付金の配分があるわけです。これは非常に重要な問題でございまして、今後、具体的に検討を進めていくわけですが、先ほど発言されたかたもおっしゃっていましたが、やはり頑張った者がちゃんと報いられる、そういう形にしていかなければいけないと思っておりますが、一方で、大学といっても公的な存在ですので、できるだけ低いコストで最大のパフォーマンスを上げることは重要なことではないかと思っております。

いずれにしろ大学、国立大学にしろ、私立大学にしろ、どれだけ社会からの支援を得られるのかということが重要

な鍵ではないかと思っております、やはり大学はこれだけ変わった、これだけいいことをやっている、そういうことを示していく。恐らく、評価というものは急に出てきたように思われるかもしれませんが、評価は見えない形で、何らかの形でこれまでもやられてきたのだと思います。ただ、それを見える形で社会に示して、なおかつ改善につなげていく。こういうシステムチックなところがまだまだ未成熟なのではないかと思っております、そこをいかに作り上げていくのかということが非常に重要な鍵ではないかと思っております。

それから、最後のご質問で、多様化を進めていくということで、一つのフレームワークでは難しいというお話でございましたけれども、それはそのとおりだと思っております。やはり大学ごとに個性、理念、特色、それぞれ違うわけでございます、その一つ一つに応じた評価が求められるのではないかと思っております。それを解決する鍵としては、私はまず、自己評価にあるのではないかと思っております。大学として一体どういうところを目指していったら、その活動が順調にいったのかどうか、それをいかに検証していくのかどうかということは、まず大学自らがそこを評価していく。そしてそれを、客観性を高めるということで、いろいろな第三者評価があるのではないかと思っております。重要なのは、やはり自らがどういうふうに大学を考え、どう評価していくのかということではないかと思っておりますけれども、この点は今後の検討課題であらうと思っております。

(木村) 最後ですので、ご質問をされたすべてのかたにお答えしたいと思います。

まず、最初の学生の評価ですね。これは私自身、東京工業大学におりましたときに、工学部長のころ、学生評価、授業評価をやるということではじめたのですが、なかなかうまくいかないのです。どういうことか、私のその当時の解釈は、日本人の学生は、大学4年から大学院になるとまあまあのですけれども、殊に英国、私は英国しか知りませんが、英国の学生に比べると社会的な成熟度が非常に足りません。それは当たり前でして、日本はすべてが現役志向ですね。18歳で、言葉は悪いですが、東大の法学部に入った人がいちばんいいわけですから。これは言い過ぎですよ。

しかし、外国ではそうではないのです。別に年が若かろうが、なかろうが、関係ないということです。それから、英国の家庭も、例えば高等学校を出てすぐに大学に入ることなど全然奨励していません。どこかに行って社会経験してこいというのが、英国の社会の普通の習慣になっています。「ギャップイヤー」だとかいろいろなことで、自分の好きなことを1年ぐらいやってから大学に入るということで、非常に社会的な成熟度が高いわけです。英国はそういう学生です。日本は、そういう社会的な成熟度が低いということがああるかと思えます。

皆さん、グレゴリー・クラークさんをご存じだと思います。上智の教授で、その後、多摩大学の学長になり、今、秋田の県立の国際教養大学にいらっしゃいますけれども、彼と議論したのです。グレゴリー・クラークさんがまだ上智にいたときで、私は日本人の学生による授業評価を信用しないと云ったら、彼も「そのとおりです。私なら、成績のいい2割の学生にやらせます」と云ったのです。なるほど、そういう手もあるかなと。ところが、それから数年して、彼が多摩大学の学長になって会ったら、「先生、この間の発言、撤回します。日本人の学生、なかなかやりますよ」ということで、多摩大学で学生評価を1年生からやらせて、見事に機能しているということですから、もちろん学生の力量もあるのですが、まずは学生を信用することだという気がします。ただ、ヨーロッパなどに比べると、学生、若い人の社会的成熟度が若干足りないんで、その辺のところは気をつける必要があろうかと思えますけれども、グレゴリー・クラークさんの言を借りれば、「日本人の学生、けっこうやりますよ」ということですから、信用できるのではないかと、それが第1点です。

それから、2番めのO国立大のかたのご質問で、評価というのは短期的なものしか見られないのではないかということですが、残念ながら、私はこれにはイエスと言わざるを得ないのです。今のような評価、世界じゅうのどの評価を集めても、50年も先のことなど絶対予測できません。要するに、先ほどから申し上げているように、教育についていえば、ある種のPDCAのメカニズムがあれば、ひょっとするとこれは長期的にも成功する可能性があるという程度にしか、私は申し上げられません。

東工大でいつも議論になるのは、白川先生、ノーベル賞をお取りになりました白川先生ですが、東工大では先生の業績を的確に評価することができずに、ある部分干されていたのだと思います。唯一、講座研究費があったので、それで生き延びて筑波へ行かれた。もちろんノーベル賞の業績は東工大のときのものです。その点でよく言われるのは、

「評価で白川先生のような人を落とすな」ということですが、これは無理です。絶対無理です。私は、それはできないと申し上げる。同じことが長期的な評価についてもいえると私は思っております。

それから、予算の問題ですね。これは、新しい評価システムにしたら、それに基づいてきちんと予算を配分すべきだと思います。私も何度も聞いたことがあります。京都大学はいつも東大の予算のいつも3分の2と、そういうばかなことは、多分、きちんと評価が機能すればなくなるだろうと思います。ただ、また英国の例を出して恐縮ですが、英国も非常に激しい研究評価をやっています。だけど、ふたを開けてみると、何のことはない、オックスフォードやケンブリッジがいちばんもらっているのです。そういう評価にしかっていないのです。例えば一つの学部で、ローヤルソサエティの賞をもらった人が何人いるかとか、外部資金をどのくらい取ったかとか、ドクターの学生がどのくらいいるかとか、論文がどのくらいあるかということを見ていくと、そうになってしまうのです。

だから、ひょっとすると、3分の2ということにはならないと思いますけれども、やはり、見ると、残念ながら、東工大にいてしゃくでしようがなかったのですけれども、東大がいちばんもらって、京都が2番め、東工大は9番めぐらいということになるかもしれないけれども、希望としては、国立大学の場合、評価の結果が運営費交付金にフルに生かされてこなければだめだと私は思っております。

最後、多様化のご質問ですが、これは全くおっしゃったとおりで、日本の大学は多様化しないと、国際的にも、それから国内でも生きていかれないわけです。そうすると、やはり評価の方法は考えなければいけない。ただ、現在、私どもの評価機構ができた目的が、日本の大学の個性化と多様化なのです。そういうことで、私どもの評価は相対的な評価はしませんで、ミッション・ステートメントの記述を先にお願ひしています。これがきちんとしていないと評価できません。書き直しをお願いすることもありますけれども、これを最初に書いていただいて、それができているかどうかを評価するということですから、そういう点では多様化という道は私は十分生かされていると思います。

長くなりまして、失礼しました。

注

- * 1 フロアからの質問については、発言内容を質問者に直接確認していただくことが困難であったため、質問者の氏名は明示していない。